

新山協ニュース

第 8 号 新潟県山岳協会 発行者 鈴木敏雄

新潟県遭難対策協議会について

五十嵐 篤 雄

我が国における最近の登山人口は一千万人を超えているといわれています。質的にどのような登山者か判りませんが、毎年痛ましい山の遭難事故があつたと断たないのも当然で、これが社会問題に発展している現状です。

そこで新潟県でも山岳遭難事故を調査研究し、山岳における痛ましい事故を未然に防止するとともに捜索、救助等に万全を期すため、昭和四十一年に県関係機関、山岳関係団体、各団体等および学識経験者によって新潟県山岳遭難防止対策協議会が発足し年一回の会議がおこなわれてきました。

私もいくたびか出席しましたが内容は形どりで、その年におきた山岳遭難の実態報告、山岳遭難事故発生状況一覧表の説明、全国山岳遭難対協の報告、あとは各地区又は団

警察官の職務に協力援助した者の災害給付に関する法律第二条(第一条省略)職務執行中の警察官がその職務執行上の必要により援助を求めた場合、その他これに協力援助することが相当と認められる場合に職務によらないで当該警察官の職務遂行に協力援助したものがそのため災害を受けたとき(中略)国又は都道府県はこの法律の定めるところにより給付の責に任ずる。

②前項の場合のほか水難、山岳における遭難、交通事故その他の変事により人の生命に危険が及び、又は危険が及ぶうとしている場合に自からの危険もかえりみず職務によらないで人命救助に当たった者。

山岳遭難救助隊、地元山岳会に適用するためには警察官がその職務執行上必要により援助を求めた場合と②の事実が認められた場合にのみ適用するという解釈になります、警察の要請もないのに勝手に救助にゆき二重遭難や事故をおこした場合は適用しないといふことになります。

群馬県では二月十八日に登山指導センターを開所し、遭難防止と登山指導に関する業務を開始した。

谷川岳登山

指導センター

開所される

群馬県では二月十八日に登山指導センターを開所し、遭難防止と登山指導に関する業務を開始した。

猟師と冬山

佐久間 惇 一

今次大戦前、私などは飯豊連峯の道のない未知の沢に入るときは、おおよそ地元の猟師を案内兼人夫として頼み、地図に沢名峯名の地元の呼称を記入してゆくのであった。そうした山人(やまにん)と山中寝食をともにして、彼等の強靱な意志と体力、それに自然の中に溶けこむような生活技術と態度に学ぶところが多かった。

しかし、スポーツとしての登山と野獣を狩ることを目的とするマタギ(大型獣を捕る山神を信奉する猟師)の山は、おのずから異なることは言うまでもない。強えて共通するところと言えば、積雪期の山中行動と山中の生活技術的な面である。これとても過去のアオシシ(カモシカ)・熊とりのマタギの集団統制の理念が、山の神信仰によって行われているのに対し、登山者のそれはスポーツアルピニズム

に立脚していることで、根本的に相違のあることは論ずるまでもあるまい。

山をグランドとするマタギが山をどのように考えていたか。われわれの先人は、山地は山の神の住み家であり、山中はすべて山の神の支配地であり、里と異なる世界である。山中の樹木も岩石もそこに住む獣もいっさい山神の所有物である。したがって野獣を捕る狩猟は、山の神から授けられたものという観念があった。山中で山神の意に添うような行動をとらなければ、獲物もないし、身に危険が及ぶものとしていた。山中では里とは違った山言葉を使用した。朝夕水垢離を取っていたことは、こうした考え方から発している証差である。

山は神霊の鎮もるところという観念、すなわち山中他界観は、日本人の過去の精神構造にかかわる問題である。マ

タギの山中行動を観察する場合、ここから発現している行動が多いのであるが、しかし、ここではそれらのいちいちの事例を述べる余白がないので、岩船郡朝日村三面に寒中に行われたスノヤマ(特殊神事的なアオシシ補り)のことを対象としながら、登山者に多少でも参考となる事項を思いつくすままに述べておこう。

スノヤマは、昭和八年ころからすでに廃されている。そのころは、新潟県の登山界では冬山登山がようやく曙を告げた時期であり、私も昭和九年三月に二王子岳スキー登山をしている。スノヤマのことを一部要約してみると、次の一、参加資格の制限があること。

冬の間には、背にはアオのキカワを着て、胸当て、上膊は猿や穴熊の皮でおおい、指は穴熊皮製の二股のテカワをつけ、足はアオの肢皮で作ったケタビをはく。このような装備は厳寒風雪期において、しかも、どんな荒天でも前夜決めた狩場へ行き、終日、狩りに従事しなければならぬスノヤマでは、保温性のある冬山装備として不可欠のものであった。そのほか、ミノと笠も必携品であるが、ミノは寝具ともなり、笠は合図にも使われる。

頭部はプシという覆面をかぶるが、どんな吹雪でも耳を露出するよう要請されている。ゴト)の必要部分や山言葉を予め鎮守社などにおいて教えられる。

山中の狩猟団の階層制度。

二、参加資格の制限があること。

冬の間には、背にはアオのキカワを着て、胸当て、上膊は猿や穴熊の皮でおおい、指は穴熊皮製の二股のテカワをつけ、足はアオの肢皮で作ったケタビをはく。このような装備は厳寒風雪期において、しかも、どんな荒天でも前夜決めた狩場へ行き、終日、狩りに従事しなければならぬスノヤマでは、保温性のある冬山装備として不可欠のものであった。そのほか、ミノと笠も必携品であるが、ミノは寝具ともなり、笠は合図にも使われる。

頭部はプシという覆面をかぶるが、どんな吹雪でも耳を露出するよう要請されている。ゴト)の必要部分や山言葉を予め鎮守社などにおいて教えられる。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

三、食糧、獲物の分配。

主食は米及び餅であるが、各自定められた量を持参し、山中では共同管理され、食事はあくまでも平等分配であり、すべての分配が終わらなければ、全員箸を取ることはできない。昼などの行動食は、飯は凍るので草餅を焼いて持参していた。獲物の分配はすべて平等均等である。

四、頭固め

準備会が行われ、参加者は全員必ず集まり、その後、各人が村中の各家に出発の挨拶をする。スノヤマ参加の意志決定が強固となるわけである。また、初マタギは法事(ホウゴト)の必要部分や山言葉を予め鎮守社などにおいて教えられる。

山中の狩猟団の階層制度。

準備会が行われ、参加者は全員必ず集まり、その後、各人が村中の各家に出発の挨拶をする。スノヤマ参加の意志決定が強固となるわけである。また、初マタギは法事(ホウゴト)の必要部分や山言葉を予め鎮守社などにおいて教えられる。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

山中の狩猟団の階層制度。

スノヤマの組織は、山小屋生活においては、フジカ(統

率者、山神祭祀を行ない世襲)・ナガラ(長老)・オーマタ

ギ(教育掛)・ホウジョウ(分配責任者)・シノボ・コ

マタギ(炊事・雑役)の身分階層に分れ、仕事の分担と責

任が決められている。これはフジカを除き、スノヤマ経験

年数の多少で定められる。すべて各階層を経る上意下達で

あり、また下意上申も必ず直接の上司を経て、コマタギが

フジカやナガラにちか何いを立てることはできない。行

動はすべて定められた通りに行われ、また上層には絶対服

従であり、いささかな恣意も許されない。

しかし、アオを巻いて追う狩場では、もっともアオシン

捕りに精通し山地経験の深い者が指揮者となり、フジカが

必ずしも指揮を取るとは限らないのであるが、一般の猟と

は異なるので、戒律の多いのはもちろんである。すべての

基調として成立展開しているわけである。

三面には、過去においてアオシンの集団猟には右のスノ

ヤマのほか、自由参加を許し、フジカもなく階層もなく、き

びしい戒律もないアオシントリが行われていた。これはサ

ルヤマと称されていた。スノヤマの猟具は槍であり、サル

ヤマでは鉄砲も携行されたが、獲物はサルヤマの方が少な

ったという。三面の人たちによれば、この差は精神的緊張

度の程度の現われであるとい

う。

スノヤマの場合、装備と体力の充分な狩人を選び、しか

も集団統制をきびしくし、緊張を持続せしめて厳冬の危

険を克服し、獲物を得ていたわけである。大型獣のアオ・

熊を捕る過去の猟師が、幾山も直登直降することの労を少

しもいとわず、また、棒ずり(グリセード)などの敏しうな身のこなしなどは、登山者のよく知るところである。ここでは、地元の山の気象・

地形に精通している彼等が、冬山において、いかに経験の

集積を重視し、さらに集団の力の総合発揚に対処していた

かという点に眼を向けてみたのである。

いかに遅ましいマタギとい

えども、精神的緊張を欠き、てんでバラバラでは獲物は得

られないし、冬山の危難にさらされるわけである。

冬山登山におけるリーダーシップとメンバーシップが最

報

告

第33回国民体育大会

少年女子監督

本問博

一、事前準備

(1)強化合宿

⑦選手の把握と意識高揚

北信越予選会で僅少差で富

山に辛勝し、選手の気持ち

が動揺した。その安定を欠

いた状態で調整できないま

ま、予選会前に計画した第

一次合宿に入った。これは

悪の状況の中で、強力に発

現されるための条件づくりが、

平素からあらゆる面にわたり

準備されたいなければなら

ないことを想うものである。

(日本山岳会員)

注 三面のスノヤマの詳細

は、森谷周野「三面郷の狩

猟習俗」(文化庁編「民俗資

料選集 狩猟習俗Ⅱ」昭和五

十三年)を参照されたい。

これは監督が選手一人一人

の考えを、明確に把握でき

なかったためである。

の学習に支障をきたすことを

おそれ、故意に点をおとすこ

とを考えた選手がいらないと

いえなかった。(幕営撤収時

の遅れ)真剣に取り組んでい

る者との間に深い溝ができ、

チーム内の統一がとれなかつ

た。

これは監督が選手一人一人

の考えを、明確に把握でき

なかったためである。

これについては自校の顧問

は勿論他校の顧問の応援を得

て、如何に国体が大切なものか、その価値と社会に対する

効果が絶大なものかを諄々と

説き聞かせた。又、学校長か

ら激励会を開いてもらって説

得したり、両親を通じてたり選

手の先輩を動員して大会に全

力を尽くすよう、選手を鼓舞

したが効果は少なかった。こ

れは、年度頭初の選手選考の

際、充分大会出場に肉体的に

も精神的にも耐えられるクラ

ブ員であるかどうかを検討し、

確かめて選出しなければなら

ないことを痛感させられた。

体力を重視し過ぎた甘さがあ

った。

①現地調査

数多くやる程よい事であるが、少くとも全員が4コースを踏査する必要がある。

その場合、食糧計画や重量調整は本番と全く同じ状態で実施されなければならない。

そのため八月下旬に気象条件に差はあるが、四日間第二次強化合宿を予定したが果たせなかった。又、九月九日、十日、成年男女、少年男女全員の合同合宿が少年女子の都合によってわざわざその月に組まれ、事前に充分に選手に都合を聞き、了承を得て準備を進めた。それにもかかわらず

前日になり一人は家事都合、一人は風邪の理由で欠席し、結局リーダー一人の参加で終わってしまったことは、非常に遺憾であった。裏切られたというか、飼犬に手を噛まれるような断腸の思いであった。

三年は進学、就職をひかえ、二年は就学旅行の季節でもあり重複しないように、支障の

ないように気を使った事が甘えを起させ、裏目に出たよう

だ。少年男子少年女子のリーダーは意欲満々で燃えていたのだが。成年は勿論のこと。

(2)資料書、計画書の作成
八月中に資料作成、原稿作成。九月二十日資料書完成。

十月第一週に計画書完成を目標に準備を急いだ。九月に入ってから二学期が始まれば当然時間が必要になるので、夏季休業中には原稿作成まで完了してはならない。し

かると八月二十八日のまとめの段階で資料収集が精一杯であった。せっぱつまらないと意欲を起さない事と二年連続出場で前年の経験から「何とかなる。」と安意さの他に、経験者に依存し、まかせっぱなしになっていた。反省としては資料書、計画書をもっと深く掘り下げ徹底的にやるべきだった。具体的には、自然、気象に関しては、おおむねよいが、文化、歴史、史跡の研究不足であった。又、それぞ

れの大きさ使い易き防水は適当と判断する。計画書は日程時間の細部がわからず完全に完成したのは、四日前であった。天気図を貼付するスペースを考慮しておくこと。完成から競技第一日までの分。

(3)装備に関して

⑦登山靴

登山靴は季節、場所によさわしいものと規定されていた。これは当然皮製のものを購入し、早いうちに穿き慣らし

ておかなければならないことは、昨年の経験からも充分知っていたし、いわれていた。しかし予算のめどが立たず、九月中旬に発注し現品が到着したのは十月二日だった。早速事前に二回、二日にわたって各二時間速歩ではきならしたが不十分であった。実際に一度は登山しておかなければならない。

本番ではマメの破れ二人一ケ所づつ。靴ずれ三人一ケ所づつ。一人は左右親指爪に青あざができた。着用靴下は

薄いストックキングと毛糸靴下二枚合計三枚はいていた。毎日足の手入れを充分行った。

(4)健康管理
⑦夏中、氷製品の禁止
⑧中毒のおそれのある古い食品は、絶対口にしない。

⑨体力調整については、出発前日までトレーニングを欠かさないこと。

⑩一週間前から水分の摂取量を規制すること。

⑪一週間前より特に風邪をひかないように注意した。

(一人は本人の不注意で風邪をひいた。

⑫温度計
携帯に邪魔にならないよう小型でこわれない金属ケース入りの窓の開いたものを準備した。

⑬マヨネーズ
チューブでつくったコップに50ccごとに目盛りをした。

⑭天幕は、まだまだスピード化するための改良余地あり。

⑮メインロープの固定化。ベグ・ピンの打ち方。底にX型紐をつける等。

(2)第一日 A四コース 三人合計 45Kg

⑯一番目に出発し十二番目に到着する。早さは関係ないが、遅れる原因がある。理由は、大、小休止後の出発動作が

⑰全国大会
(1)出発日は適当であった。

食糧購入の時間配分が難しい。出発前日購入分と入山前日の購入品目を明確にリストアップし、購入漏れのないようにする。

⑱一人は本人の不注意で風邪をひいた。

⑳一週間前より特に風邪をひかないように注意した。

㉑一週間前から水分の摂取量を規制すること。

㉒一週間前より特に風邪をひかないように注意した。

㉓一人は本人の不注意で風邪をひいた。

のろかった。又、観察(周辺の

やはり読図から方向と距離

あった。

しまった。出発時少くとも5

いたならば、重量不足で失格

の植物・景観・気象等の記録)を
出し、あわてず正確に、歩
数から距離を算出しなければ
ならない。従ってコースマッ
プを与えられた時点でそれぞ
れの分岐点とその間の距離を
読みとり、歩数を出しておく
ことが必要である。特に地形
に高低がある段丘や村落内の
道路は、迷い易い要注意の所
である。

要点は迷わないようにして
時間を短縮すること。読図の
正確さ、途中事物、景観に注
意し特徴あるものはすべて記
録することが大切である。

それぞれに分担をきめ互い
に信頼し合うと同時に一人一
人がエキスパートでなければ
ならない。

もっとも第32回国体長野県
選手には \odot の重量調整法があ
るようだけど考えられないこ
とはない。ゴール近くの大橋
で荷物のバランスを見るとか
でザックを開けさせる。又、
ラジオのチューニングテスト
あり、他に保険証の写しの所
持を聞かれる。

最終日は、選手と行動を共
にするようにいわれ宿舎へ引
きあげた。
反省点としては、重量不足
はあくまでも失格に相当する
コースが、たまたま好天に恵
まれ、気温が上昇したとして
も2.1Kgだけのオーバーで出
発するの間違いである。第二
の間違ひは、飲まず食わずで
2.1Kgをキープしなかった事
である。疲労が蓄積してくる
と、まあいいや、おっくうだ
という頭脳の働きの鈍くなる

前研究不足のためであった。
霊仙寺山頂で審査あり。戸隠
牧場終了時に担荷重量の計測
がなかった。牧場では共同キ
ヤンドルと特に個人の非常用
キヤンドルと体温計とそれに
使用以外の軍手スベアについ
て審査あり。

ポイントの問題は地図符号
の読み方が多かった。P5崖、
P6針葉樹、P7水準点、P8桑畑、
P9小・中学校、P10岩、P1石段、
P2神社、P3病院、P4城跡、の
それぞれのマークがあり、そ
の読み方を記入する。設問ポ
ストはこれと別にあり、通過
途中の事物の注意力テストが
多かった。例はコースわきの
木にその科名と名称を記入し
た札がつけてあり、後でその
木の科名を記入するものや神
社、寺の名称や何番の礼所か
を問うもの等、他に山頂の標
高や標高差、直線距離、概念
図を書くものなどがあった。
予想されるほとんどのものが

(4) 第三日、A三コース 三
人合計 55 Kg
朝非常に冷えこむ。撤収後
自主計量する。皆木18.7 Kg、弥
田19.2 Kg、中村19.2 Kg、計57.1 Kg、
2.1 Kgのオーバーでしかない。
リーダーはそれを確認してい
た。又、すでに入山前夜の計
量で第三日目全装備の日は、
重量不足になることを予想し
て3 Kgの砂袋2ケを準備して、
回送荷物に入れようとした。

しかし出発地点の幕営地に
はすべて計量器と砂、砂袋が
絶対用意してあることを確認
して捨てさせた。結果的には
出発時に2.1 Kgオーバーのまま
砂袋を追加せずに、出発して

少年女子の終了時計測をして

(3) 第二日、B二路査競技、

三人合計 45 Kg

三番目に出発。地図上にな
い道があり、コースを誤る。

これは事前踏査不足と経験不
足が原因である。経験による
感の方が早く便利であるが浅
いと迷いを生ずるものになる。

予想されるほとんどのものが

予想されるほとんどのものが

予想されるほとんどのものが

予想されるほとんどのものが

予想されるほとんどのものが

予想されるほとんどのものが

予想されるほとんどのものが

予想されるほとんどのものが

のが一番恐ろしいことである。酸素不足になると同じ事が起るけれども、それを認識し修正する必要を忘れてはならない。

参考までにメンバーシップの点で、選手が同一校である方がよいという事は必ずしも正しくない。混成チームで

長野は例外としても、三位の茨木、惜しくも失格した栃木。岡山も非常に良かった。少年

女子15チーム中の1/3の5校が混成チームで少いが良い成績をあげている。しかし二位の秋田は単一校代表であり、立派なチームであった。

総合的反省として混成でも単一でも良いチームづくりをしなければならぬこと。特に強力な精神的結束が大切であることが痛感させられた。

単一校の秋田も混成の栃木も良いチームであった。事前現地調査は、万難を排して回数も多く取る必要がある。重量調整は常に合計5kgオーバーで出発すること。疲労してもそれに負けて憶くうになら

ないこと。常に意識的に明朗考えること。

さを失わないようにすること。

細い点ではアルコール固型燃料が意外と便利である。

ビンール袋は個人と共同のものも準備する。15分の休憩でもおいしく咽が通る昼食を

昭和五十三年度

全国高校登山大会報告

小林 光 衛

二十二回を数える全国高校登山大会は八月二日から六日迄の五日間、福島県南の浅草岳・会津駒ヶ岳・田代山・帝釈山・燧岳で開催されました。山々を存分に楽しみました。

各都道府県から男子九十一校、女子四十四校が参加、本県からは新発田高校が男子B隊に、三条高校が男子C隊、新潟中央高校が女子D隊にそれぞれ参加し健闘しました。

二日、開会式、幕営。三、四、五の三日間はそれぞれの隊で登山行動。六日、閉会式という日程でした。八月上旬の猛暑、毎日異なる山域で山頂を往復するといった事情から全隊、全行動ともサブ行動でし

た。大会は福島県高体連登山部が中心となり、福島県岳連の全面的なバックアップで申し分のない運営で、南会津の山々を存分に楽しみました。選手諸君ものびのびと楽しんでやうです。浅草岳、燧岳には時折登っても、会津駒、帝釈、田代といった山々は考えずにはいても仲々機会を見つけたことができなかったのです。すが、参加できて本当に良かったと思います。去年の大会で一番感じましたことは、体力・技術ともにその向上ぶりは驚くべきものであったということです。私は四十七年に始めて参加しま

したが、当時と比較いたしますと隔世の感があります。見てくださいの大会用の技術ではない。基本に忠実な逞しいチームが全国的にふえたということとです。

閉会式での技術委員長講評から今後の課題となる点をひろってみますと、炎勢下でもコンディションを作りあげうる体力の養成と研究。体力の消耗を防ぐ歩行技術の研究と習得。最小にして最大の効果をあげ得る装備の工夫。計画

去る十一月十八・十九日藤島玄先生、佐藤一栄さんをお迎えし、晩秋の日本平にて各山岳会九団体五十一名の参加者で、楽しいうちに「生活技術全般に亘っての实地講習と日本平展望登山」が開催された。

十八日、もみじの紅葉のすばらしい村松公園を抜け、溪谷の美しい早出川にそって小面谷部落を通り田河内橋下の

第三回 婦人部登山

豊島 美知子

河原にて幕営地を設けられた。十六時開会式が行なわれ平田大六部長に次ぎ加藤チーフリーダーから「生活技術全般について学び有意義な山行ができるように」と挨拶があり、その後佐藤一栄さんから焚火の实地講習会が行なわれた。

燃えやすい木、燃えにくい木の見本が用意され、手にとりて教えていただき、自分達の手で焚火をしたが、なかなか

書は使う立場に立っての現実的なものの工夫等の指摘がありました。私は技術員の立場で参加いたしました。が、審査することの難しさを改めて感じました。男子九校、女子五校が優秀校として表彰されましたが、本県では新潟中央高校が表彰されました。

火のつきが悪く、山での焚火の難しさをあらためて知った。十八時から全員で焚火を囲んで夕食をとりながら各山岳会の自己紹介をし、藤島玄先生から火についての体験談を聞き、道具のない時代にいか

に焚火が重要であったか知らされました。

その後むさび会の若手グループによる司会で、宴会が催され歌ったり、踊ったりで盛り上がり、若い歌声は、夜空のかなたにこだまし、満天の星は、はてしなく広がっていた。

越後ハイキングクラブの差し入れて焼いものサービスがあり、思いがけないまろやかな味覚に舌づつみをうった。

翌十九日は、昨日の快晴と違って変わって雨になった。

加藤チーフリーダーを中心に三パーティーに分け出発する。早出川ダムにさしかかる頃から並雨になり、時折強く降る

雨は心が沈む。しかし、駒ノ神を過ぎ金ケ谷に近くなる頃から晩秋の渓谷は、霧の摩周

湖を想像するように霞がかかりロマンの夢がふくらむ。岩柵と紅葉のいいようのない調和。こんなに味のある深山があることを知り嬉しい。ダムによって変わりゆく金ケ谷を感慨無量に見詰め、新しくつけ変えられた道を単朝に歩く。途中落石がありドキドキしたが無事通過する。

金ケ谷沢出合からようやく登りになる。雨はやむことを知らずようしゃなく降り続く。所々雨流は、沢であるかのごとく流れ山道をうめる。振り返ると辿った道が平坦に白く筋を引き、暮れゆく秋の静けさがいいようのない安逸を与えてくれる。

わずかに十五分の登りで旧道に交わる。赤松の太木が一本ドッシリと構えている。二百年は風雪に耐えたであろうこの松は、風格よろしく何か名

所がほしいところである。ここで休息をとる。落葉樹の多い雑木の場所で佐藤一栄さんの得意とする岩石の話の話を聞く。雨は小雨になった。これか

ら急登だ。ブナ林を抜け三分で尾根に出る。開ける河内の山波はあいにく見えないがそれでも山の深さが身に感じられすばらしい。山道は自然にかえて、苔がはえて人の気配を感じない。加藤氏からあい黒の松の説明を聞きながらとうとう目的地の床屋に辿り着く。ブナと雑木に囲まれたこの場所は、設営にけっこのな所で先発の男性によって既に焚火がなされていた。暖炉があったことは、とてもすばらしい贈り物であった。

昼食をすませると平田大六さんから仮小屋造りの実地講習を受け、来た道を下山する。あいにくまた小雨になり、風に追われるように下山である途中晴れ間を見て佐藤一栄さんからナタの使い方、懸垂の指導を受け、雨にたたかれながら幕営地に着く。

十五時三十分閉会式で解散したがこんなに内容が充実した婦人部登山であったことを感謝し、次の山行に生かしていきたいと思えます。

恒例の冬山登山講習会はマクネリ化している、きびしい山を選んで欲しいと泉山協からの要望があり、下越地方で一泊二日の山を検討してみたいがアブローチ、宿泊等の都合で、きびしい山を選ぶ訳にはゆかなく、山の物足りないところは講習内容でおぎなおう、というこで国鉄飯豊ハウスのある焼峰山を会場に選び案内を送した。

ところが申込は三団体十八名だけ、これでは講習会にならない。早速主人達に電話してみると「五人でゆくつもりです」「申込まなかったのも三人連れてゆきます」等々で当日になってみないと人数の掌握ができず、四十名位の見当で段取りを進めた。泉山協行事はいつもこれで困っているようだ。

ステツ

冬山登山講習会

無事終了

三月十日 小雨

例年ならば丈余の雪で埋れている筈の赤谷は雪片すらなく、おまけに雨降りとは不思議な年だ。

冬山登山講習会

無事終了

五十嵐 篤 雄

東赤谷駅から踏切もない鉄道線路をなん本も横断して今夜の会場国鉄飯豊ハウスまでは流石に雪を踏まねばならなかった。日暮れ頃から各山岳会の人達がぞくぞく集ってくる。十八時開講までに六十名を超え、段取りをしている下越山岳会の面々はこの番狂わせで大董わ。

講習会内容
焼峰山を中心とした山と谷の話。五十嵐篤雄
講師、木樵、炭焼等が使った金標輪標の話。杉原八百樹 講演

冬山と猟師 佐久間惇一氏
山登りの根生 藤島 玄氏
二十時終了(二階では二十一時三十分まで理事会)懇親会
夕食、二十二時就寝。

見当で段取りを進めた。泉山協行事はいつもこれで困っているようだ。

十一日 みぞれ後雪

国鉄飯豊ハウス出発七時、昨日の雨のため飯豊川の渡渉は断念、都合で帰った人達を除き四十三名が各自の車で滝谷までゆく。

林道始点で四班に分れ班長と実技講師各一名宛加わり各班別に行動、但し頂上に十二時全員集合というところで行動開始。

池ノ平植林から輪標を穿く、輪標、穿き方の種類の多いことに驚く、この辺で例年より二米位も雪が少ない。

トウデの平あたりでは湿めっぽい雪が降っていたが、イチ登りから北西の風が強くなり赤倉又沢源頭ではバランスを失う位の吹雪となってくる。右に蒜場山、組倉山、左下に内ノ倉湖、その奥に高知山と見えるのも標高七〇〇米位、清水釜までくると全然見えなくなる。修葺峰を越え、吹雪の本峰の登りはフィルムクラスで輪標が埋ったり埋らなかりたりで神経を使う。

ら中食の夢は見事にはずれ、目口開けられない吹雪のたちんぼう。流石にベテラン揃え十二時頂上全員集合した、気温零下8.0°である。中食は風当りの少ない清水釜でと大急ぎにくだる。降雪著しい中での中食は山慣れたものの仕業である。

6、関川村山の会4、新大山の会2、越後、秀峰1、津南1、高体連1、下越13、講師2、計七十四名。

五十三年度日山協 指導員講習会 報告

秀峰山岳会

小林 由夫

二月十日、十二日富士山で日山協の指導員講習会が行なわれ、私と長岡ハイクの田中栄弘さんと二人で参加して来ました(各県代表二名)

二回に分けて行なわれ、私達の参加したのは二回目です(一回目は一月十五、十七日十八日三十名)十名二十名でした。講師は日山協の増子春雄氏をチーフに、森川洋佑、佐藤秀有、岡本安夫、沢入保忠の各氏でした。

参加者数、長岡ハイク5、ピオレ6、新潟映彩12、むさび4、新潟望遠5、中条山の会9、新潟山岳会2、豊栄講習内容の説明と自己紹介コ

ンパ。十一日、七時半〜十六時半まで行動食持参で冰雪技術研修会、夜はミーティングの予定でしたが、埼玉岳連、神奈川岳連の指導員検定会の人達が同宿し満員の為簡単に終了自由コンパとなった。

十二日、五時発富士山頂往復(タイムリミット九時半時点で下山)十四時富士吉田解散という日程でした。

さて本題の研修内容ですが、

あれもこれもやると結果的には何も得られないということ、氷雪上に於けるスターカレット及びコンテナス時の滑落停止、制動確保とザイル操作だけにしほり、その新しい技術(?)の修得ということでした。

天気は良いのですが風が強くなりザイルと云われる状態の中で二人パーティ、アイゼン着用、体でおぼえることが一番大事とのこと、ゆっくり休む時間もなく、くりかえしやらせられた。

て(文章にすると分りにくいと思いますが)雪面にピッケルを差し、シャフトにピレーザイルを通しそれにカラビナをつける。カラビナにはメイザイルが通っている。確保者はピレーザイルを足で踏みつけ、カラビナが靴の甲の附近で自由に動くようにする。(よってピレーザイルの長さが分かる)カラビナを通して来たメイザイルを確保者は肩がらみで確保する。

トップが滑落した場合、確保者の前を過ぎるまでザイルをたぐり、過ぎる時点で制動確保の体制に入る。この場合ピレーザイルを踏みつけていた足はしっかりふんばってないと確保者は飛ばされる。

この方法はピッケルが十分差さらくとも効果があるとのことでした。

コンテナスの場合の確保(これが目新しく感じましたが、)この確保の変った点は確保者もピッケルを雪面に差し腹ばいになって確保する体形(一人での滑る停止の形)

をとるとのことです。

この場合ザイルワーク(操作)がひとつのポイントとなっている。確保者の側から記すと(ゼルブストバンドとカラビナは必ず着用)自分の体にフィックスしたザイルを四つ五回ループ(右巻)にして左手に持ち、それを肩からゼルブセトのカラビナを通してトップにメインザイルが行く。

て滑落するパーティもあり、我々も同類であった。

この体制で行動中相手が滑落した場合、左手ループの一番外側のザイル(これはすぐ肩の方に向かってるので左手の親指にひっかけてある)だけをはなさず、ピックルのシャフトと一緒に握り足場を固め、ピックルピックルの方を雪面に差し腹ばいになって確保する。これは確保者が左手ループにしていた時の余分なザイルがシャフトを握っている左手と肩と腰のカラビナによって制動がかけられるということ。この二つの方法を斜面を変えながら一日中反復練習させられた。最初の頃或いは斜面によって十分確保出来ず二人し

当県山協と同様各県共選手

考へ、参加については四苦八苦ししているらしい、又現在の国体登山競技の方法についても賛同しかねるところがほとんどであった。だから日頃の登山のあり方と国体とは別個の問題として、これは国体用という考え方では異なるを得ない。その為参加団体が少なく予選をやらぬ県もあること、又強化費が多く出る県では選手を出さねばならぬ、良い成績も上げねばならない。しかるに他の競技と同様に良い選手ですと?毎年同じ人から出てもらう県もあるということでした。だから今後競技内容は右にいくか左にいくか分らないが、毎年変わっていくだろうという話でした。

奥鐘山まで、国内の多くの登山を心ゆくまで楽しみ、お互い自分自身のトレーニングとして実践して来た。しかし、ヨーロッパ、ヨセミテ、それにヒマラヤのピックルルートは僕達には、机上プランの域から出ず、「夢の中の、あそこがれ」に変わってしまった。そんな心の中から、ロマンチズムにも似た叫びが、今回の訪韓を現実にさせた。

にもれず、計画の中心を水瀑

登山の实践ということで意志を燃やしていた。しかし今年は、暖冬であった為、氷の状態も悪く、納得のいく登攀も出来ぬまま、雪岳山を離れなければならなくなった。僕達は、残り少ない日数を、楽しく岩登りをしよう、ソウル郊外のゲレンデ仁寿峰に出かけた。仁寿峰は、日本では味わえない程の花崗岩で楽しく岩登りが出来る所であり、クリンクライム(精神的な)が出来る岩場である。僕達は、本番前にとボウルダーリングをして遊んだ。20mも続くフレックを、アンダーホールドとEBSシューズのフリクションで登る、クラックを両手でジャミングをして登る。実にいい感じである。岩質が良いと気持ちまでスッキリしてしまう。なんとなくシンプルに気持ちで登れる所がいい。

動き
ナチュラル・クライム
イン・コーリア

雪岳山は、韓国で一番、美しい山であり、日本の穂高、剣に匹敵する山である。特に冬期は、氷瀑登攀を目指すグライマーで賑わう。最近注目されている土曜城瀑布も、雪岳山を代表とする名瀑の一つである。

日本では、最近、氷瀑登攀もちょっと下火の傾向ではあるが、僕達には、まだまだ未知の領域であり、僕達も例外

渡辺尚幸

仁寿峰のルートは、シュイナードが開拓した。シュイナードA・Bルートを初め、フ

リーの快適なルートが多く、人工のルートは、あまりない。韓国のクライマーは、人工登攀をあまり好きではないらしい。ルート図を見てみても、壁の弱点をついたルートが多い。日本のように、ダイレクトルートの隣りに初登ルートがあったり、そのすぐ隣りに〇〇ルートと言うようにルートが氾濫していない。僕は、最終日、ノーマル、A、B、を登る予定でいたが、スラブに雪が着いてしまい、西壁のポルトルートへ行った。

以上が行動の概要である。しかし結果は、どうであれ、今回の訪韓で一番、思った事は、登山活動よりも、人の考え方や、コミュニケーションの温かさを知った。今回、僕達のパートナーとして同行してくれた人達は、韓国の山岳界における、有名人であり、とても人間的な温かさを持っている人達であった。今回の訪韓で知った事は、自然という組織に対して、ナチュラルな気持ちで対応するという事

である。その方が感動も大きい。いし、気持ちの上でもハッピーになれるという事であった。また、これを機会に、考え方が、自分自身に対して影響を与えていくと思うし、より人間らしくなれるような気がする。僕は、これからも素直

谷川岳危険地区の
登山禁止について

融雪期を迎え、今後の気温の上昇に伴い、谷川岳では大規模なナダレの発生が予測され、登山することが著しく危険であると認められるので、「谷川岳遭難防止条例」第七條の規定に基づき登山禁止をすることにいたしました。

一、登山禁止地区
マチガ沢、一の倉沢、幽の沢および南面(中ゴウ尾根を除く)の危険地区。

三、登山禁止期間
昭和54年3月4日(日)から
昭和54年3月25日(日)まで。

な気持ちで岩を攀るだろうし、また一步、一步、自分達の夢に近づき努力をしようと思う。訪韓を終えて。

RCSIJ韓国雪岳山登山隊
隊長 小島正彰24才
春日良樹24才 渡辺尚幸20才
以上三名 尺取虫同人

中国親善訪問旅行と
泰山登山

海外登山委員長 望月力

かねて、協会の海外登山委員会でも海外登山について、検討を続けてまいりましたが、今度、中国側のご好意で泰山の登頂の許可を受けました。登山対象の山としては、高度こそひくいけれど、中国の名山の一つに教えられる山です。

登山と中国国内の視察旅行を兼ねての海外遠征となりま

期日 昭和54年7月31日～8月13日(13泊14日)

旅程 北京～青島～濟南(泰山登頂)～天津～北京

費用 三一〇〇〇円

人員 30名(協会加盟員かその紹介者)

申込 4月20日(金)まで、申込金一〇〇〇〇円を添えて協会事務局へ申込み下さい。定員になり次第切らせて頂きます。

お知らせ

文部省主催の昭和54年度登山指導者雪上技術講習会が、

6月1日(金)～6月5日(火)までの五日間、立山の研修所で開催されます。参加者は費用七一五〇円を添えて5月10日迄、協会事務局宛申込み下さい。

新年度協会費
分担金
〇現金書留等送り先
長岡市学校町1-12-23
室賀輝男方

新潟県山岳協会宛
〇銀行振り込み
新潟県山岳協会口座宛
第四銀行長岡東支店
口座番号(普通) 121262

あながき

第34回国体山岳競技(宮崎大会)の県予選会が4月14日～15日、角田山周辺で開催される。今年度は新潟地区が担当で、各山岳会が各種目に分かれて、これまで何回となく踏査され、準備が進められてきた。ご苦労様です。

山登りが競技化ということとなんとなく抵抗を感じる登山者も多いことと思います。しかし、競技化の根底には、山登りの基礎技術を重視して、安全登山の追求にほかありませ

さん。多く競技に参加して、皆さんのすばらしい技術を披露しあって、技術の向上を考えたいものです。